

考古遺跡の保存と活用 -東京近郊・野川流域の場合-

安蒜 政雄¹⁾・野口 淳²⁾

1. はじめに

明治大学校地内遺跡調査団では、2004年度より、東京都下原・富士見町遺跡の発掘調査を継続的に行なってきました。遺跡は、野川中流域の右岸立川面

上、調布市・三鷹市にまたがって所在します(第1図、写真1)。近・現代(調布飛行場関連)、縄文時代、後期旧石器時代の複合遺跡で、とくに後期旧石器時代については、同時代の遺跡が多数分布する野川流域の中でも群を抜く規模です(明治大学校地内遺跡調査団編, 2007)。

発掘調査は、明治大学付属明治高等学校・明治中学校の移転・新校舎建設にともなう、いわゆる「事前調査」として行なわれました。つまり、遺跡そのものが現地に残されることなく、図面・写真および取り上げた遺物などの“記録”の上で保存される「記録保存」という枠組みで実施されたのです。このため調査が行なわれた範囲については、2007年7月現在、建築工事が急ピッチで進められています。



第1図 下原・富士見町遺跡の位置。



写真1 下原・富士見町遺跡とその周辺(1984年撮影)。

1) 明治大学 文学部
2) 明治大学 校地内遺跡調査団

キーワード: 考古遺跡, 記録保存, 後期旧石器時代, 野川, 都市近郊型ジオパーク

2. 遺跡保存の制度と現状

もちろん、考古遺跡の保存・活用を考えたときに、現地における現状保存が最良の手段であることは間違いない。しかし「事前調査」においては、つねに遺跡保存の必要性和、調査のきかけとなった開発事業の必要性・公益性が比較されます。この問題は、とくに計画変更や代替用地の確保が困難な都市部においては重大です。私たちが調査した下原・富士見町遺跡においても、学校建設の必要性との関係の中で「記録保存」と判断されました(写真2)。

現在、日本では、考古遺跡・資料は「文化財」であり「国民的財産」であると位置づけられています(文化財保護法第4条の2)。また「貝塚、古墳、都城跡、城跡旧宅等の遺跡で我が国にとって歴史上又は学術上価値の高いもの」は「記念物」のうちの「史跡」として保護が図られています(同第2条の4)。2007年4月1日現在、国指定史跡は1,598件です(特別史跡含む、文化庁HPによる)。

一方で「事前調査」による考古遺跡の発掘調査件数は、年間約8,000件と言われています。国だけでなく、都道府県、市町村レベル、そのほかさまざまな枠組みでの保護・保存の取り組みもあります。しかし現状では、大多数の遺跡は、「記録保存」の枠組みの中で消えていく運命にあります。

そもそも「記念物」「史跡」制度は、数あるものの中から取捨選択を行なうということでもあります。しかし選ばれなかったものに価値がないわけではありません。このことは、後期旧石器時代遺跡の場合とくに重要です。

現在、先に挙げた1,598件の「史跡」のうち、後期旧石器時代(を含む)遺跡はわずか4件に過ぎません^{注1)}。その背景にはさまざま事情を読み取ることが可能ですが、ここではその時代の特徴、それを反映した遺跡のあり方が、そもそも「記念物」「史跡」という概念にそぐわないことを指摘したいと思います。

農耕を開始する以前の、狩猟採集を中心とした遊動生活を営む比較的単純な構成をもつ社会が残した生活の痕跡＝遺跡は、極端な格差を持ちません。一地点への物資や人間活動の集約度も、後の時代と比べるときわめて小さなものです。つまり、他を圧する「記念物」を構築したり、特殊な活動や物質文化を残したりすることなく、日常生活の痕跡だけがそこかしこ



写真2 下原・富士見町遺跡発掘調査風景。
※写真：明治大学校地内遺跡調査団。

に残されるような時代だったのです。

わずか4件という後期旧石器時代遺跡の史跡指定件数は、ほかとの極端な違い、特徴を見出し難い中で、選択的な判断が難しいことを反映しているのではないのでしょうか。しかし“どこにでもあるようなもの”こそが時代を特徴づけるのであって、「歴史上又は学術上の価値」を持っているのです。

私たちは、“どこにでもあるようなもの”であっても保護されなければ、いつの日にか“どこにも残っていないもの”になってしまう恐れがあることを、たとえばトキやコウノトリの絶滅から教訓として学んでいるはずです。

日本列島における後期旧石器時代とは、この地に到来した人類が氷河時代の環境に対応し定着を果たした時代です。同時にそれは、汎地球規模に展開した現代人の拡散過程に位置づけられるものです。そのような意義のある時代の遺跡も、うかうかしているといつの間にかなくなってしまうかもしれません。

このような状況の中で現在必要なのは、遺跡保存の必要性を十分に説明し実行するためのスキーム(計画)の確立はもちろんのこと、開発か現状保存かという二者択一的な判断を超えた、多様な保存・活用手法を模索することではないかと考えます。

3. 「記録保存」の付加価値を高める

さまざまな保存・活用のかたちの、そのひとつとして「記録保存」において保存される“記録”の付加価値を高めることが挙げられます。



写真3 考古・地質・地理学研究者による共同調査。
※写真：明治大学校地内遺跡調査団。

私たちは、下原・富士見町遺跡の調査にあたって、考古学のみならず、地質・地形・土壌など各分野の研究者と連携し、共同調査、巡検、シンポジウムを行ってきました(明治大学校地内遺跡調査団編, 2005a, b)。これは「記録保存」の枠組みの中で残される「記録」に、考古学以外の情報を付加することで、その精度・内容を高めるための取り組みです(写真3)。

遺跡を包含する地層、あるいは遺跡が成り立つ背景としての地形などの情報は、遺跡が残されない限り、同時に失われていく宿命にあります。ならば、発掘調査と同時にできる限りの記録を行わなければならないでしょう。

もちろん、こうした取り組みは私たち独自のものではありません。そもそも野川流域はローム層研究の出発点でもあり、調布市野川遺跡(小林ほか, 1971)をはじめ、考古学と関連諸科学による共同調査・研究が進められてきたフィールドでした。

しかし、私たちがこの取り組みを通じて実感したのは、考古遺跡に関する情報が周知されていない現状です。地層断面や旧地形をオープンカットした状態で観察することができる考古遺跡の調査現場は、ボーリング調査やトレンチ調査を補うかたちで、地質・地形分野の研究に多大な貢献が可能です。もちろん、発掘調査現場にはさまざまな事情や制約があります。しかし多くの場合、限られた時間・範囲の調査であっても、地質・地形について必要な情報を得ることが可能です。最後にはなくなってしまう遺跡の調査現場において、必要最小限の記録を取ることに躊躇する理

由はなく、また他分野との交流によって解決する課題も少なくないはずです。

考古遺跡は元来、地域の地形・環境と固有の歴史の中で生み出され、残されたものです。地質・地形に関する調査の実施は、記録される情報の質・量の増加につながり、結果として「記録保存」の成果を高めることにつながるはずですが、情報を共有し研究者を結ぶためのネットワークづくりは、今後ますます必要になるでしょう。そして法的に記録保存の制度が整備されている考古遺跡の調査が、その基軸になるべきだと考えます。

4. 普及と活用への取り組み

また「記録保存」は、その成果を研究者だけでなく、市民へ還元しなければなりません。私たちは考古遺跡の調査にあたって、その専門性をもって「国民的財産」の一端の「記録保存」に参画するのです。

下原・富士見町遺跡の調査においては、遺跡の所在する調布・三鷹両市教育委員会(遺跡調査をはじめとする文化財の保護・活用は教育委員会の所管)からの要請もあり、地域住民への調査成果の還元が課題となりました。そこで調査途上の2006年、発掘調査の現地説明会、一般向け講演会、専門家向けシンポジウムからなる「野川流域の旧石器時代」フォーラムを、調布・三鷹両市教育委員会と私たち調査団の3者主催で実施しました。参加者はのべ655名におよび、講演会とシンポジウムの内容については記録集を刊行しています(明治大学校地内遺跡調査団編, 2007a, b)。また近隣の中学校の、校外見学の場としても活用していただきました。なお2007年には、企画展示「野川が映した3万年-旧石器時代の暮らしを探る-」の開催を予定しています^{注2)}。

ところで発掘調査の現地説明会の実施にあたっては、当初懸念がありました。後期旧石器時代の遺跡は、とにかく一般向けの“みどころ”に欠けるのです。竪穴住居や墓穴の跡があるわけでもなく、きれいで、大きい、珍しい遺物があるわけでもないからです。そこで私たちが“みせる”ことにしたのは、1) 実際の発掘調査風景、2) 立川ローム層の露頭断面、3) 調査終了面にあたる立川礫層の3つです。そして主催者側は、ここに記した順に一般の興味が集まるのではないかと予想していました。



写真4 現地説明会(1):発掘調査を見学。
※写真:明治大学校地内遺跡調査団。



写真5 現地説明会(2):3万年前の川原と地層の見学。
※写真:明治大学校地内遺跡調査団。

しかし蓋を開けてみると、聞こえてくる感想の内容は、予想とは大きく異なっていました。作業員のみなさんに展示の一部になっていただいた調査風景は、テレビなどでもおなじみになっているせいか、とりたてて“珍しい”ものではなかったようです。3mを越える地層の厚みに3万年の時間を体感してもらえるのではと期待したローム層の断面は、あまり“ピン”とはこなかったようです。

それに対して、“3万年前の川原”立川礫層に対しては、予想をこえた反響がありました。「ハケ」と通称される国分寺崖線沿いという土地柄、段丘地形とその成因について基礎知識をもっている方は少なくありませんでした。しかし実際に足もとを掘り下げると“3万年前の川原”が現れるということは、ほとんどの方の想像を超えていたようです。そして知識として知っていたことを、実際に体感し理解できたことに感動していただけました(写真4, 5)。

さらに礫層への興味を出発点に、「ハケ」が氷河時代の環境と関連してできた地形であること、その周囲に遺跡が多くあることへと理解は広がります。今回の調査地点のもっとも古い生活の痕跡は立川礫層の直上に捉えられたのですが、その意義—つまり離水直後の低地に、すぐさま旧石器時代人が訪れ生活範囲に組み込んでいたということ—の理解にもつながりました。

こうした経験により私たちは、一般への普及・活用の観点においても、地質・地形との一体化・総合化が考古遺跡の立体的復元、理解のために有効であることを実感することができました。

5. 遺跡保存からジオパークへ

さてここで、なぜ考古遺跡を保存する必要があるのか、基本的な命題に立ち戻りたいと思います。私たちは、そこにはきわめて明快な論理があると考えます。考古遺跡は、過去何百・何千・何万年間にわたる人類活動の結果として遺されたものです。ひとたび失われてしまった時、すぐに代替・補充が可能なものではありません。この点で、化石燃料資源との対比が可能です。むやみに採掘(発掘)してしまえば、いずれは枯渇してしまいます。これは自然環境や地形・地質環境についても同じことです。

化石燃料資源に対比して、考古遺跡は知的資源、文化資源として位置づけられます。その枯渇は、知的・文化的活動に支障をきたすでしょう。私たち人類の来歴を知ること、現在とは異なる多様な環境下に展開した、多様な文化の存在を知ることへの可能性を閉ざしてしまうからです。

そこには、自然／人文という二分法は不要です(「自然-人文シームレス」:桂, 2007)。

たとえば、後期旧石器時代人が日常の生活用具の材料とした石材(岩石)について考えてみましょう。火山ガラスとしての黒曜石は鋭い剥離面を得やすく、利器の材料として重用されました。しかしその分布は地質学的な過程により決定され、後期旧石器時代の人びとにとっては動かしようのない前提条件として立ちはだかります。良質な石材の産出地を見出し、開発すること、そこからどのようなかたちで持ち運び、どこを通り生活の場へもたらすのか、必要に応じて石器

を作り、不足を補うためにはどうしたらよいか、様々な課題に直面し、対応して作り上げられた技術と行動の体系を、私たちは考古遺跡と出土した遺物をもとに復元しています(安蒜, 2003など)。

このような研究においては、地質学(岩石の分布)、地理学(遺跡立地や移動ルート)、考古学(遺跡・遺物)などの連携が重要です。いずれかが欠けても成り立ちません。となると、考古遺跡の保存は、ただ考古学の枠組みだけにとどまるのではなく、さらに関連諸科学と連携すべきであることが明らかになるでしょう。北海道遠軽町における“白滝ジオパーク”の構想は、その先駆的な試みです。

一方、私たちが調査した下原・富士見町遺跡は、記録保存の対象となりました。現地に残らなかった遺跡、そして地質・地形との関わりについて、調査の成果を今後どのように活用することが可能なのでしょうか。調査後の報告書作成と並んで、私たちに課せられた宿題です。

6. 野川流域の場合—都市近郊型ジオパークは可能か—

下原・富士見町遺跡は、国分寺崖線に沿って流れる野川の右岸に位置しています。宅地化が進む一帯にあって、国分寺崖線に沿った地域には緑が多く残されています(若林・鏑村, 1991, 2001)。

ひとつには、急傾斜地という開発を阻む地形的要因があります。それだけでなく、地域や行政の取り組みもあります。環境保護、景観保全については、現在、東京都環境局による「国分寺崖線緑地保全地域」指定をはじめ、行政や外郭団体、さらには市民団体による取り組みも多く進められています((財)世田谷トラストまちづくりトラストまちづくり課編, 2006。および文末URLなどを参照)。

とは言え、国分寺崖線沿いの湧水はつねに枯渇の危機にさらされています。すでに開発が先行しているため、緑地保全地域は飛び地状態です。住民の安全確保、生活道路の整備のために、崖線の自然地形は各所で改変されています。

世界屈指の大都市東京の近郊にあって、全面的な環境保護、旧状の復元は事実上不可能でしょう。それよりもむしろ、現在そこに住んでいる地域住民、地域社会もまた、歴史的な景観の一端を構成している

との認識のもと、環境・景観保全優先的な長期計画を策定することが必要です。

国分寺崖線は、氷河時代の気候・海水準の変動の痕跡を伝える地質・地形遺産です。そうした地形が東京の都心から電車で30分以内のアクセス至便な場所によく残っているということは重要です。そして崖線の成立後、多摩川の流路変遷とともに広がる新たな低地を舞台に、後期旧石器時代の狩猟民の遊動生活が繰り広げられました(野口・林, 印刷中)。また崖線沿いの豊富な湧水は、先史時代を通じて多くの人びとを引きつけてきました。野川沿いの多数の遺跡—野川流域遺跡群—の存在は、国分寺崖線の成立という地質学的過程を抜きには語れません。

さらに時代が下った後も、野川と国分寺崖線沿いには人びとの歴史が積み重ねられてきました。そこには、野毛大塚古墳(世田谷区:都指定史跡)、武蔵国分寺跡(国分寺市:国指定史跡)、深大寺城跡(調布市:国史跡指定答申中)など各時代の史跡が残されています。次大夫堀公園民家園(世田谷区:区指定有形文化財)や大沢の水車小屋(三鷹市:都指定有形民俗文化財)では近世江戸近郊の農村の暮らしに触れることができます。調布飛行場とその周辺の戦跡もまた、積み重ねられた歴史の一コマですし、その上にさらに、現在の地域の生活が営まれています。

国分寺崖線と野川の流域には、3万年前の汎地球規模の運動により生じた地形を基盤に、後期旧石器時代から現在に至る人びとの暮らしが重層的に残されています。あたかも、崖線の切り通しに顔をのぞかせるロームの地層と重なり合うかのよう。

そして現地に残された史跡、旧跡や緑地、湧水地も、残されなかったもの、すべてが地域の歴史と交錯する中で現在のすがたに至ったのです。

現在、個々の緑地保全地域や自然公園、遺跡、旧家などは、それだけでは断片的に孤立した状態ですが、それらを有機的に結びつけることによって、地形を作り出した地質学的過程から現在に至る3万年間の地域の自然史と社会史・人類史とを立体的・重層的に理解するための重要なサイトになり得ます。

その手始めとしては、すでに各自治体が設定し整備している“散歩コース”“散策コース”を活用することが可能です。もちろん、地質・地形について、一般向けのコースがすでに設定されています(大森監修, 1989など)。大都市近郊という立地上、地域内の移動

は容易です。

さらにその上に、考古遺跡の「記録保存」の成果を重ね合わせることも可能でしょう。従来型の案内板、説明板だけでなく、今日、QRコードと携帯端末を利用し、各場所で自由に付加情報を取り出すことも可能になっています(山口・榎沢, 2004)。こうした電子情報技術により、自然環境から地域史へ、あるいは地質・地形環境へと、さまざまなテーマを横断し、あるいは自由に往来するかたちで情報を検索、利用は容易になりました。それを、書斎の机の前ではなく、現地で、リアルタイムに受け取ることも可能なのです。

そこには、発展的、専門的な情報として、記録保存された遺跡、さらには道路工事によって一時的にあらわれた露頭やボーリング・データなどの地質情報、古地図や古い航空写真から読み取られた地形情報なども重ね合わせることが可能です。それらは多岐にわたり、かつ大量になることが予測されますが、情報化し仮想空間に収納することで、将来的な発展も容易になるでしょう。もちろん、一般・専門をあらかじめ区切る必要もありません。

多分野・多方面にまたがり、かつ時間幅も大きな事象を、現実空間において実体的に示すことは困難です。逆に仮想空間ではその特性を踏まえて、空間的な広がり、時間的な重なりを越えて自由に行き来できるような情報化ができます。現在の環境・景観から過去へ遡及する歴史・地史複合的な普及プログラムも可能かもしれません。

そしてこの枠組みにおいては、既存の博物館や資料館、観察施設などが、仮想空間と現実空間-実際の遺物や資料、現地に残された実体としての自然・遺跡など-とを結ぶ、ネットワークの中のハード面でのハブとなり得ます。もちろん、現実空間においてしか保存できないものは少なくない上に、体感性という面ではるかに有効なことは間違いありません。

そして何より、こうした枠組みは、人的資源、情報、交通・通信手段の集積が進んでいる大都市とその近郊でこそ実現可能なものでしょう。私たちはこれを「都市近郊型ジオパーク」として位置づけ、その可能性を検討してみたいと思います。

7. おわりに

下原・富士見町遺跡における主要な発掘調査は

2007年1月に終了しました。現在、私たちは発掘調査報告書作成のための整理・分析作業に取りかかっています。しかし、単に考古学の専門性に寄与するためだけのものでは不十分だと考えています。これからも引き続き、成果の普及・公開に積極的に取り組まなければなりません。

「記録保存」の対象となった遺跡は、残念ながら現地に残されることがありません。しかし発掘が行われたからこそ分かったことも多くあります。それを再び地域に還元することができれば、遺跡は「記録」として残り続けることになるはずです。

とは言え本文で提起した構想は、まだ“絵に描いた餅”以前の、夢想の段階に過ぎません。すでに示されている「エコミュージアム」(新井, 1995など)の枠組みなどを手がかりとして模索していきたいと思いません。

注1)

群馬県岩宿遺跡, 神奈川県田名原遺跡, 長崎県福井洞窟遺跡, 同・泉福寺洞窟遺跡。ただし後2者は指定要件や指定範囲に縄文時代も含む。なお、かつて宮城県座散乱木遺跡も後期旧石器時代以前の遺跡として国指定史跡であったが、2000年の「前期・中期旧石器遺跡捏造」事件の後、2002年12月に史跡指定を解除されている。

注2)

三鷹会場：三鷹市役所2Fホール 会期：2007年8月20日～9月6日。

調布会場：調布市郷土博物館 会期：2007年10月22日～12月7日。

文 献

- 安藤政雄(2003)：黒耀石と考古学 駿台史学117。
 新井重三(1995)：実践エコミュージアム入門 牧野出版。
 桂 雄三(2007)：天然記念物指定の意味。自然史研究におけるフィールドの活用と保全 講演要旨集 日本第四紀学会。
 小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男(1971)：野川先土器時代遺跡の研究 第四紀研究10(4)。
 野口 淳・林 和広(印刷中)：武蔵野地南部立川面における地形形成と遺跡分布のモデル。土と遺跡、時間と空間 六一書房。
 明治大学校地内遺跡調査団編(2005a, b)：シンポジウム立川ローム層下部の層序と石器群 予稿集, 同 記録・コメント集 六一書房。
 明治大学校地内遺跡調査団編(2007a)：明治大学校地内遺跡調査団年報, 4 明治大学。
 明治大学校地内遺跡調査団編(2007b)：野川流域の旧石器時代 六

一書房.

大森昌衛監修(1989):東京の自然をたずねて 日曜の地学4 築地書館.

(財)世田谷トラストまちづくりトラストまちづくり課編(2006):自湧時間特集・身近な秘境・春夏秋冬.

若林高子・鏑村英次(1991):生きている野川 創林社.

若林高子・鏑村英次(2001):生きている野川それから 創林社.

山口 徹・榎沢 順(2004):歴史・対話・街の創出 千葉商大紀要 42(3).

参考ホームページURL

文化庁(文化財)

<http://www.bunka.go.jp/bunkazai/index.html>

日本地質学会「ジオパーク」

<http://www.geosociety.jp/organization/geopark/>

白滝黒曜石遺跡構想推進協議会ジオパーク

<http://www16.ocn.ne.jp/~srk-gp/>

東京都都市整備局「国分寺崖線景観基本軸」

<http://www.toshiseibi.metro.tokyo.jp/kenchiku/keikan/>

keikaku10.pdf

東京都環境局「立川崖線緑地保全地域 国分寺崖線緑地保全地域」

<http://www2.kankyo.metro.tokyo.jp/sizen/hozentiiki/syokukai/28gaisen.htm>

(財)世田谷トラストまちづくり トラスト事業まちづくりセンター「国分寺崖線保全活動」

http://www.setagayatm.or.jp/trust/emergence/kokubunji_line/index.html

三鷹市「緑と水の基本計画 第2次緑と水の回遊ルート整備計画」

<http://www.city.mitaka.tokyo.jp/a014/p032/t03200071.html>

三鷹市「みたか水車博物館」

<http://www.city.mitaka.tokyo.jp/suisya/index.html>

AMBIRU Masao and NOGUCHI Atsushi (2007): Conservation and Use of Archaeological Site: in case of Upper Palaeolithic Sites along Nogawa, environs of Tokyo Metropolis.

<受付:2007年9月26日>